支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

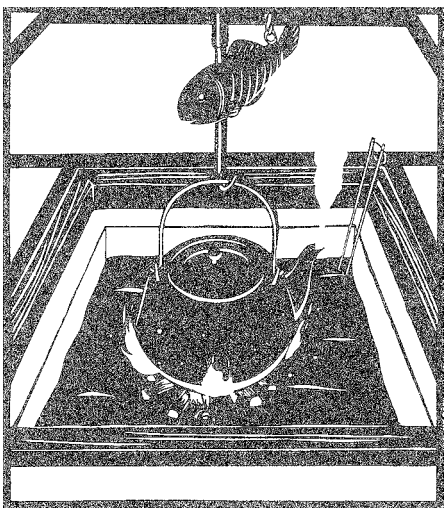
「焼き石で暖」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

「温暖化」なる言葉を耳にしなかったあの頃は、南に位置するとはいえ、故郷・相馬の冬は寒いものでした。

ハナを垂らしていた幼少期の家は、まだ囲炉裏生活でした。家の中では常に微風が吹いていました。

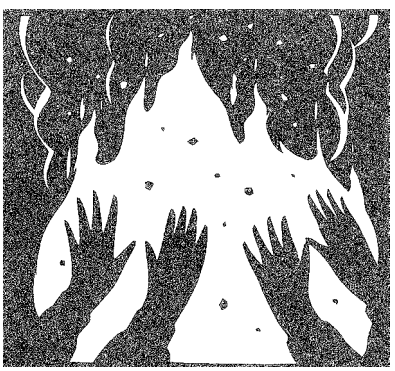
中学時代となると家が改造され、縁側の雨戸はサッシに代わり、囲炉裏は無くなり広い居間は小さく区切られました。そんな中、やはり囲む火がないとなぁーということで、土間にはドラム缶を輪切りにして作った大きな火鉢が置かれました。



冬の自転車通学では、風の当たる手が冷たく、寒い日は軍手を二重にしても、息を吹きかけても凍えたものでした。そこでわが家では当然のようにこんなことをしていました。

河原から平べったい楕円形の小石を拾ってきて、火鉢の灰に突っ込み温めました。そして、その小石をボロ布に包み、軍手の手のひら側に入れたのです。

指先までは十分ではありませんでしたが、こうして暖をとりながら、4キロメートル先の統合された中学校目指して、ペダルを踏みました。



資料によれば原始時代、湯を沸かすのに炉で石を焼いて水に入れ、またその石を焼いては水に入れ、それを繰り返したとのこと。

囲炉裏といい、焼き石といい、何とわが家は原始時代だったのかと、煙で目がしみるような思いになります。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める